

ベストクラス選定理由書

作成者：山田詩織、原上寛規、綿貫克洋、勝田太郎、小倉早織、小川公大、高橋優太、吉水裕也、藤原和政、藤井良憲

科目名称 : 食育の考え方と進め方 (昼間クラス)	
(担当教員名 : 岸田 恵津、山本 忠志、藤本 勇二)	
課程 : 修士	開講時期 : 前期
授業形態 : 講義・演習	授業規模 : 31人以上
インタビュー対象教員名 : 岸田 恵津 (実施日時 : 令和4年8月23日(火) ; 実施場所 : オンライン)	
インタビュー対象受講者名 : 齋藤 ゆき、熊倉 誠、尾花 和哉、高田 英里香 (実施日時 : 令和4年9月13日(火) 13:00~14:00 ; 実施場所 : 図書館グループラボ)	
<p>選定理由</p> <p>今回この授業を選定するにあたり先生へのインタビューを行い「ベストクラス」という言葉とこの授業がいかに深い関係にあるかを知った。まず学生・教職員FD活動交流会の中でも言われていたが選定にはベストティーチャーではなくベストクラスであるということが、つまりクラス全体が一体となって良い授業を生んでいるということが求められる。そして今回インタビューさせていただいた授業が見事にそれらを行っていたのだ。実際に食育というものを取り上げる際に学習指導要領の総則を見るに、食育は体育、家庭科給食などの特別活動はもとより例えば社会科で地域の農業や産業との関わりを学ぶように多くの科目に教科横断的に関わっておりそれを学ぶために多くの視点が必要でありそれらが学べるような授業が行われていた。これによりこれを知っていた生徒はさらなる研究を行ったり、知らなかった生徒は強い関心や学びの意欲が湧いたのであろうと思う。それらを裏付けるような授業形態や次に示す毎回の授業の最後にあるワークシートや学期末に行うプレゼンテーション及び意見交換に現れていた。まず全体の授業の流れを説明すると、各回の末尾にワークシートを書いてもらうこと、そして授業の流れとして『食育』の担い手、内容、方法の三つの誤解から出発し学校における食育の求められる位置づけ家庭的視点、保健体育的視点を経て食育単元計画作成及び発表という流れである。毎回の授業の最後にはワークシートに意見を書くというシステムを取り入れることで個々が思考して自論を持てるようになっている。これを用いて授業を受講して多様な視点や研究課題を持って食育単元計画を作り互いに発表し合い意見を交換し合う、というクラスが一体となり学習意欲が湧くようになっていたのだと思う。また時期的にプレゼンをZoomで、意見交換をTeamsで行ったことによりより多くの意見や充実したプレゼンができたようである。また先生方も様々な話をする事で授業時間を目一杯に活用できていた点も素晴らしいと思った。今回のインタビューを経てクラス全体が積極的に参画し対話できるような授業であり、また食育というテーマによる教科横断的な多様な視点による授業が興味深い関心を持たせられたのだと思う。これらによってこの授業をベストクラスに選定したいと思う。</p> <p>・受講者インタビューより</p> <p>家庭科の資格を持つ者によると改めて家庭科と向き合うきっかけになったことや、高校の現職の者は食育というものを何処か家庭科などがやることだと捉えていたがそうではなくてどの教科とも関わりのあるものなのだと気付かされた。また受講生が生徒役となり模擬授業を行うことで授業のレ</p>	

パーティを増やすことができた。このような受講してよかったという意見があった。授業の雰囲気もよく皆が積極的に課題解決を目指しクラス内で良い関わり合いができたことやブレイクアウトセッションでの話し合いが大学院内で良いコミュニティを産むきっかけになったということも大いにあるようだ。食育の実践的な教育を行ったものによると実践をやった上でもう一度理論的なところを学ぶことでそれらの関連を理解できると言っていた。これは逆に理論をこの講義によって得ることで実践を現場で行うときに役立つことにもなるだろう。

このように家庭科について既に実践的なことをしている者もしていない者にも価値のある授業となっていたこと、この授業の参加型な雰囲気やみんなで考えるという形が結果的に個人単位で良い人間関係を産むきっかけになったこと、そして食育が家庭科や給食の特別教育だけでなく多くの文系的理系の科目と教科横断的に結びついていることを学べたことが受講してよかったと感じたことのように思う。